

■ 2014年11月期 CPD ミニ講座

「コミュニケーション ” 伝える ” と ” 伝わる ”

ー 初等教育と市民への放射線出前授業の経験から ー

講演者: 秋津 裕氏 (京都大学大学院 エネルギー科学研究科大学院生)

日時: 平成 26 年 11 月 12 日 (水) 18:00~20:00

場所: 技術士会荻手第2ビル5階AB会議室

主催: 日本技術士会 CPD 実行委員会



ー 講師のご紹介 ー

秋津裕氏は、ここ最近、放射線被ばくの影響や今後の進退等に不安を抱える被災された福島県民の方々、特に小さな子どもを持つ世代に対して、住民の自助を支えるための活動に取り組んでいる。本年 8 月には、ICRP のダイアログセミナーへ招聘されるとともに、環境省の住民参加型車座集会において、住民目線のファシリテーターとして第一線でご活躍である。

しかしながら、秋津氏が原子力・放射線の課題に取り組み始めたのは、福島第一原子力発電所事故の前年 2010 年、母校の日本女子大のリカレント教育過程「地球環境エネルギー産業講座」が最初である。前職も幼稚園の主任教諭であり、いわゆる専門家ではない。以降、消費者/母親の視点からエネルギー問題や原子力・放射線リスクの理解のために学び、反原発の映画やシンポジウムへも足を運んで自身の疑問への解を求め、大学院に進学、現在はエネルギー・リテラシーの定量的評価を試み、これを通じてエネルギー教育の研究に取り組んでいる。また、職歴を生かしながら、文科省の放射線出前授業に出講し、一步一步経験を積み、今日がある。

彼女の講演からは、自身の職務経験の中から培ったリスク管理やコミュニケーションへの哲学を背景に、一見感性で行動しているかに見えながら、課題の一つ一つに悩み、相手の立場を思いやり、伝える内容を絞り込み、伝え方に工夫してきた軌跡が見える。しかも、セオリーやノウハウではなく、全てが実践であるところに我々技術士が学ばねばならない点が溢れている。

秋津氏は、この講演を行うに当たり、
『例えば出前授業で用意した教材は“伝える”道具ですが、授業の結果、何が子ども達に“伝わったのか”？を振り返らなければならないと思います。
実は“伝わった”ことは、講師の言葉ではなく、意識、意識下に潜んでいるものであり、それは主体が本来学ぶねらいとはズレている場合もあります。このような経験から、「受け手に届くコミュニケーション」とはどのようなものかについて、放射線出前授業の経験を交えて皆様とともに考えてみたいと思います。』と述べられました。我々専門家に足りなさを、再認識させてくれるものと確信しております。

本公演は、今年の技術士フォーラム 2013
「放射線による被ばくリスクと放射線防護をどう考えたらよいか？」
ー 福島復興と、人々の尊厳を守るために、我々は何をすべきかを考える ー
で積み残した、リスクコミュニケーションに関して、技術士の一つの道標となるべきものと認識しております。多数の方のご参加をお待ちしております。

ー 当日の講演内容のご紹介 (講演内容は変わる場合もあります。) ー

1. 導入: 自己紹介と前職でのリスク・マネジメントについて
2. ICRP ダイアログセミナーのご報告: 第九回に参加した所感
3. 放射線出前授業の概要
4. 幼児向け授業のご紹介
5. 小学生向け授業のご紹介
6. 大人向け授業のご紹介
7. 出会った人々のコメント
8. クロージング: 放射線出前授業を通じてコミュニケーションを考える”伝える”と”伝わる”

関連講演の概要が、原子力・放射線部会 HP 講演会見学会等報告(2014 年度)でご覧になれます。

http://www.engineer.or.jp/c_dpt/nucrad/topics/003/003056.html

以上